

5 トーマス・グラバーと長崎居留地の文化



ブライアン・パークガフニ
Brian Burke-Gaffney

グラバー園名誉園長
長崎総合科学大学教授

重要文化財であるグラバー邸の名は、長崎を訪れたことが無くても聞いたことがあるだろう。しかしその住まい手であったグラバー自身については、一般的に良く知られていない。日本を愛したグラバーの暮らしや、日本文化への貢献はどのようなものだったのだろうか。

鎖国と長崎

徳川幕府により遂行された長い鎖国時代の中で、長崎は日本で唯一世界に開かれた港であった。日本との通商権を与えられていたオランダ人と中国人はそれぞれ、江戸町前面に造成された人工の島「出島」と十善寺郷に開設された「唐人屋敷」に居住させられていた。彼らは200年以上もの間、現地の日本人と平和的に貿易を行い、多様性に富んだ独特の地域文化の発展に貢献した。

しかし、イギリスのアヘン戦争における圧倒的な勝利や東アジアへの進出は、徳川幕府が維持してきた鎖国政策がこれ以上続けられないことを明白にした。ついに安政5年(1858)、日本はイギリス、ロシア、フランス、

オランダそしてアメリカと条約を結び、複数の港を開港することを承諾した。これらの開港場では海外貿易が許され、外国人が自由に活動できる居留地の創設が容認された。長崎における外国人居留地の場所として、街に隣接する大村藩領の大浦戸町村が選出された。安政6年(1859)7月1日に公式な開港がなされると、条約国の商人、技師や宣教師が次々と訪れるようになった。

日本を愛したトーマス・グラバー

開港後いち早く長崎に上陸した外国人の中に、トーマス・ブレイク・グラバー(Thomas Blake Glover)がいた。グラバーは1838年、スコットランド北東部の港町フレザーバラで生まれ、安政6年(1859)9月にジャーデ

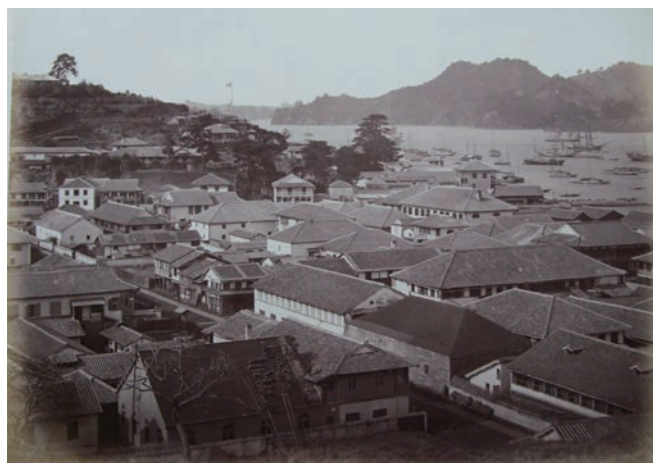


写真1 長崎居留地・大浦地区の町並みと南山手を望む。明治元年(1868)頃。左端上部の建物は老松を抱くように造られたグラバー邸。手前の大浦地区では洋風の倉庫や商店が軒を並べる

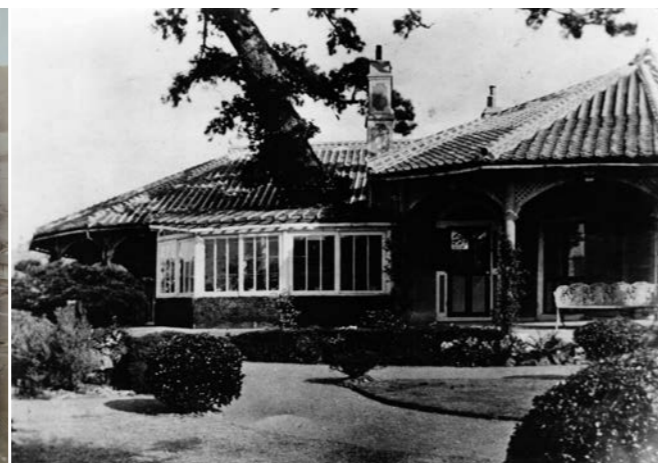


写真2 南山手の目印となっていたグラバー邸の老松

ADVERTISEMENTS.

TAKASIMA COLLIERY.

THE undersigned are prepared to supply Ships or Steamers with COALS from the Takasima Colliery—(8 foot seam)—in quantities as required. Present price \$ 4.50 per Ton, free on board.

GLOVER & Co.

Nagasaki, 19th February, 1870.

写真3 グラバー商会は英字新聞『ナガサキ・エクスプレス』に高島炭鉱の石炭広告を掲載した



写真4 トーマス・グラバーと三菱社の二代目社長・岩崎弥之助

イン・マセソン商会の事務員として21歳の若さで長崎に来た。文久元年(1861)に独立した彼は、翌年にグラバー商会を立ち上げた。グラバー商会は日本茶、樟脳、角材などの産物を輸出し、中国や東南アジアの雑貨、香辛料、金属類など、日本南西部の各藩が要求する商品を輸入した。

商人としてやり手だったグラバーは、薩摩藩や長州藩などの西国雄藩へ中古船や武器の貿易を始めた。本来ならば船の輸入は幕府の許可が必要であり、武器などの輸入は禁止されていた。しかし、倒幕を考えていた藩にとっては、すぐにも武力を高める必要があり、グラバーにとっても大きなビジネスチャンスになる。双方に利益をもたらした貿易は、グラバー商会が倒産するまで続いた。

さらにグラバーは、長州藩や薩摩藩の藩士たちをイギリスへ密航させるという、自分の身も危うくなるほどの肩入れをしている。貿易商人としての立場を超え、国禁を破ってまで藩と協力した背景には、グラバーとその客との親密な関係があったようだ。文久3年(1863)に長崎のイギリス領事ジョージ・モリソンが上司に送った報告書には「グラバー氏は日本語に長け、社交的で、高い



写真5 小菅の西洋式ボートハウス。明治15年(1882)頃「長崎競争運動協会(NRAC)」によって建設された。幕末から始まった長崎居留地のボートレースは次第に国際色豊かなものへと成長した

階級の日本人と友好関係を持っており、彼らにとっても尊敬されています」と述べている。この事実から、グラバーの日本を理解しようとする強い姿勢が明確に現れている。

史料が乏しく推測しかできないが、幕末の志士たちは正直かつ有言実行で、約束を守り、対等な姿勢で取引に臨むグラバーに好感を持っていたようだ。加えて、日本人女性の恋人たちも、グラバーにとって日本の言語と文化を学ぶよき先生となったといえる。

居留地の暮らし

長崎居留地に建物が建ち並び人口が増加してくると、居住者たちは様々な組織や委員会を作った。これには居留地の日常的な運営や日本当局との交渉を取り扱う自治会、貿易の管理や密輸の防止を担当する商工会議所などがあつた。その他、文久2年(1862)10月に東山手11番地に建てられた日本最初のプロテスタント教会堂や、居留地の東側で現在は川上町にある外国人専用墓地(大浦国際墓地)に関する事務を処理するものもあつた。大浦周辺の埋め立て工事と山手の整備が終わり、オランダ商館が古くから置かれていた出島や多くの中国人が住む新地も編入されるなど、長崎居留地は次第に拡充されていった。

また、長崎の外国人居留者たちは数々の施設をつくり、休養と社交を図った。その中には、居留地の紳士たちが集う「ナガサキ・クラブ」があつた。さらに、長崎競

争運動協会（長崎ローウイング・アンド・アスレチック・クラブ：NRAC）はボートレース大会やその他の社交イベントを毎年数回開催し、トーマス・グラバーを含む若い居住者たちがほとんど参加した。大浦31番地にあったパブリックホール（公民館）もまた居留地での行事を行う重要な施設であった。パブリックホールは会議、外国軍艦の楽隊を招いてのコンサート、ダンスパーティーや講演会の場としてよく使われた。長崎の中国人たちもまた独自の社交組織を結成した。出身地が同じで言葉や文化の面でより通じ合える者同士がビジネスや社会福祉を向上するために、福建会館、三江会所と広東会所をそれぞれ居留地内に開設した。



写真6 大浦25番地のジャパン・ホテルは長崎指折りの西洋式ホテル。ダイニングルームでは西洋風の家具と日本の屏風や掛け物が独特な雰囲気をかもし出している

外国人たちの食文化も日本に大きな影響を与えることになる。開国後、居留者たちがベーカリー（パン工場）、搾乳場や畜殺場などを開設し、西洋の家具や食器類を輸入した。居留地の狭い範囲の中で、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツ、ロシア、中国など、さまざまな国籍の人々が住み、本国の家庭料理を日常的に楽しんでいた。また、キリスト教の各宗派に加え、ユダヤ教、ヒンズー教やイスラム教の信者たちも滞在し、それぞれの宗教的戒律に従って料理を作った。結果として、実に多彩な食文化がこの地にかもし出されたが、その一方では、食材の多くは現地で調達していたので、「長崎チャンポン」に見る独特な折衷文化の様子もうかがえる。外国人たちは日本人客にも西洋料理を振舞ったり、日本人従業員にどのようにして肉料理やソーセージ、ピクルスやデザートを調理するかを教えたりして、西洋料理が全国に広まっていった。

IPPONMATSU 邸

トーマス・グラバーは日本を理解しようとする姿勢が強かったと言っても、イギリス人としてのアイデンティティを堅持し、他の外国人住民と同様に西洋式の暮らしをしていたのも事実である。日本人従業員たちは隣接する厨房で西洋料理を作り、家具を掃除し、銀食器を磨き、輸入されたバラとベゴニアの木を丁寧に剪定した。東洋趣味の調度品や芸術品がいくらか持ち込まれたことを除けば、グラバー邸はまるで長崎の山手にイギリスの暮らしの一部が移植されたかのようであり、文化、

マナー、価値観やその他のすべてが守られていた。

しかし、グラバーが文久3年（1863）に南山手に建てた住宅では和洋折衷の文化が見て取れる。日本最古の西洋風建築であり世界遺産にも登録された建物は、当ても居留地でもっとも美しく立地条件の良い家であった。インドのカルカッタや香港のコロニアル風建築を参考に、日本人棟梁が高いドアと窓、暖炉や絨毯の敷ける床を採用し、グラバーのニーズに応えるように設計した。ただし、日本の建材と工法を駆使して建てたものなので、日本瓦の屋根と和風の小屋組み、在来の漆喰壁、尺寸を用いた柱間計画といった日本の伝統的な造りとなっている。結果は予期せぬ建築の融合で、開国後間もないころの日本人と欧米人の見事なコラボレーションとなった。この和洋折衷の建築様式は「洋風建築」「異人館」「洋館」、長崎では「オランダ屋敷」などと呼ばれてきた。

旧グラバー住宅を捉えた初期の写真からは、建物のすぐそばにそびえ立つ大きな松の木が見て取れる。この松の木にちなんでグラバーは自宅のことを「IPPONMATSU（一本松）」と呼び、家の北側部分に松の樹幹を取り囲む小さな温室を造った。威厳のある古木は後に病気にかかり枯れ、明治38年（1905）に切り倒されてしまった。グラバー住宅は他にも数々の修理や増改築を重ねてきたが、今でも建てられた当初の独特な外見と雰囲気漂わせている。

グラバーの「測り知れない貢献」

グラバー商会の活動は前期と後期に分けることがで

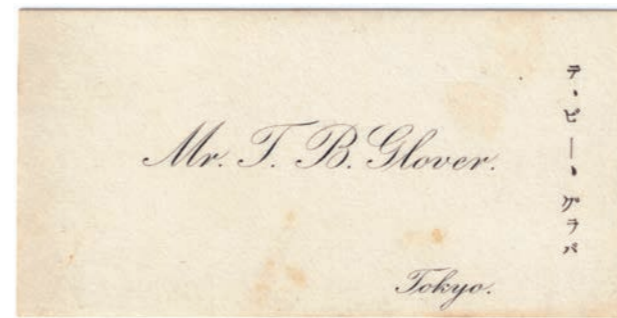


写真7 トーマス・グラバーが晩年に使用した名刺

きる。前期は中古船舶や武器の取引を含めた貿易が中心だった。後期は商取引の大半を元部下に任せ、石炭産業や造船など様々な近代技術を日本に紹介し、それに関係する機械類を輸入し、イギリス人専門家を雇った。グラバーは長崎の近くにある小菅に日本初の修船場と、日本初の近代的な炭鉱を高島に開設する手助けもした。また、居留地の大浦海岸通りに鉄道を敷き、小型の蒸気機関車を走らせて見物に集まってきた日本人を驚かせた。さらに、スコットランド人技師を雇い、日本初の灯台を建設し、日本で初めての造幣機を香港から輸入する仲介も果たした。英字新聞『ナガサキ・エクスプレス』の編集者に手紙をあてた人が、後にグラバーの業績について次のように語っている。「この国の真の歴史を述べようとするなら、世界有数の国家となった日本に対する、グラバー氏の測り知れない貢献を避けて通ることは出来ないでしょう」。

明治3年（1870）、グラバー商会は多額の借金を抱えて倒産した。最も深刻な負債の一つはグラバーが自国のスコットランドから輸入し、同年に熊本藩に売った1,500トンの最新鋭コルベット艦である。彼が返済に困っていることを見切ったスポンサー会社のジャーディン・マセソン商会は資金援助をやめ、グラバー商会は倒産を余儀なくされた。しかし、「龍驤」と名づけられたコルベット艦は、後に明治政府に寄贈され、新しい大日本帝国海軍の最初の軍艦となり、明治5年（1872）には明治天皇の3ヶ月にわたる西国御巡幸の御召艦として使用された。

グラバーは倒産後も日本に残り、急速に発展する近代産業に関わっていった。彼は東京で三菱社の顧問となり、また現在の麒麟ビールの前身であるジャパン・ブルワリー・カンパニーの設立に中心的な役割を果たした。その後、頻繁に長崎に帰り、家族と共に南山手の自宅で休暇を過ごした。

明治41年（1908）、明治政府はグラバーの日本への貢献を讃えて、外国人（特に商人）には破格の勲二等旭日重光章が授与された。伝説の人となった彼は、明治44年（1911）に東京で世界し、長崎の坂本国際墓地に埋葬された。

<写真提供>
写真1、2、4 グラバー園
写真3 長崎歴史文化博物館
写真5、6、7、8 筆者



写真8 有名な観光地となった戦後の旧グラバー住宅